

# 「影と光」における競争社会の功罪

芳川 敏博（京都府城陽市）

## 人物設定におけるテーマと「色の技法」の関連性

ジャック・ロンドンには、いろいろな技法を駆使して他の人が見逃している視点から社会の深層に迫って、読者によりよい生き方を暗示する。本稿では、「影と光」“The Shadow and the Flash” (1903) という作品を通じて、ロンドンが競争社会の功罪をどんな技法を用いてどのように伝え、約100年後の格差社会に生きる人々に何を提案しているのかを考察する。この作品の素晴らしさは、1) テーマと「色の技法」が人物設定にみごとに反映していること、2) 飽きさせない展開と、どんでん返し、3) 現代的意味が極めて高い、という3点であろう。

テーマである「競争社会の功罪」については、「多量の情報や仕事を素早く処理して、よりよい物を作り上げ、多くの富を得る」という「光」の部分と、「多量の情報を処理できないで、身体や心、頭を痛めつけたり、弱肉強食の格差社会を生む」という「影」の部分がある。

「色の技法」について言えば、色は物体が光をどのようにとらえるかにより決まるので、光は色と関係がある。また、色は「興味深い個性」という肯定的な意味と、「否定的な影響を与える」という二面性がある。(Oxford 現代英英辞典)

登場人物のポールとロイドは色以外に共通点が多い。つまり、1) 「背が高く、やせ型、よく引き締まった身体をもつ」、2) 「神経質で緊張と忍耐力が強すぎる傾向があり、張りつめた状態で暮らしている」、3) 資産家の家庭に生まれ、化学を専門とする研究者であり、物体を見えなくする方法や物質に関心があり、お互いに激しく競争している。しかし、二人は色については、異なっている。ポールは、金髪で目の色はブルー、ロイドは、黒髪で目の色は黒である。おそらく、ポールは白人を、ロイドは白人以外を象徴していると思われる。

それに対して「私」は、1) 背が低く、太っていて、ずんぐりしている、2) 怠け者である、3) バラの園芸という自然を相手の仕事をしており、

競争社会と無縁の生活をしているが、ポールとロイドの仲介者である、というように二人とは相違点が多い。「私」については、名前も身体的な色の特徴も明記されていない。これは、「私」を中立の人間に位置付け、競争社会を冷静に客観的に見つめようという表れであろう。「私」は、おそらく、一般人がロンドン自身であると思われる。

### 飽きさせない展開と、どんでん返し

飽きさせない展開と、どんでん返しを中心に、この作品の構成上の巧みさを検証する。「起承転結」の「起」の部分については、第1段落から第4段落において、上記のように象徴的な人物設定とテーマ設定をしている。その他の具体的な例としては、ポールとロイドが学生時代、長編詩を暗唱してライバル関係にあったということや、水底にどちらが長くどとまれるかの競争をし、もう少しで死にいたるところであったこと、といった点がある。

「承」の部分は、第5段落からこの小説の大部分を占めており、飽きさせない論理的な展開をしている。この部分は「光」の部分であり、競争心の「功」が徐々に強くなり、見えないものの開発が進む部分でもある。ロイドは、ポールとロイドの競争と、「私」の戸惑いを見事に描写しており、読者の関心を引き付けている。

二人は同じ大学で、化学を専攻し、見えない物質の開発という共通点を持ち、お互いを高めていった。ロイドは、「完璧に黒いものは、どんなに鋭い視覚でさえ遮って進入を許さないの、見ることができない」と主張したのに対して、ポールは完全に透明な物体は光を反射しないし影も映さないの、目に見えることはない」と反論している。

「私」はそれらの考え方が空想的すぎて、純理論的な目的以外には何にもならないように思えたので、「これは、注目すべき発見になるね」と、当たりさわりのない言い方をした。しかし、ロイドは次のような暴論を吐いている。

「まあそうだろうな。ねえ君、そんなペンキで自分自身をおおえば、この世は自分のものさ。国王と宮廷の秘密が、外交官と政治家の陰謀が、相場師の手の内が、トラストや会社のたくらみが、わがものとなるのさ。物事の内部の動きにも触れられるし、世界最強の権力

者にもなれる。」 (p. 25)

「転」の部分は、この作品の後半の「家に帰ると、ポールから短い手紙が来ていた。すぐに来いというのだ」(p.41)というところからである。ここでは、ポールとロイドのライバル心が嫌悪に変わり、競争社会の「罪」の矛盾が一気に爆発し、二人がついに死にいたる過程を劇的に写實的に描写されている。

ポールとロイドは恐るべきエネルギーを集中して、お互いが信じる「見えなくするもの」の開発を急いだ。その後、いろいろな実験を繰り返し、ついに完成した「見えなくするもの」に身を隠した二人は、「私」の仲裁も聞き入れず、自滅への道を歩んだ。

「真昼の太陽は、目がくらむように輝き、がらんとしたテニスコートに照りつけていた。コートはがらんとしていた。見えるものといえば、影のしみと虹の閃光と見えない足から立ちぼるほこりと、足でぐっと踏んばることで足もとから崩れていく地面と、一度二度と二人の体がぶつかるたびに隆起する金網だけだった。それだけだった。しばらくすると、それさえびたりと止んだ。」 (p.44)

このとき「私」は、二人が深く冷たい深みの木の根にしがみついていたときの、子供っぽい顔を思い出した。これは、ポールとロイドが競争社会の犠牲者であるということを暗示している。

「結」の部分は最後の段落である。ポールとロイドが、見えない物の開発を目指す、見えない物のために自滅するという現実の矛盾に接し、「私」は我に返る。その後、化学的実験には何の興味も示さなくなり、科学の話題は一家の禁句となった。そして、自然とともに生きることを決心する。「私」はもともと、競争社会とは無縁であったが、人の良さから二人の友人になり、競争社会を観察する。もう少しのところ、で、「私」も競争社会の犠牲者になっていた可能性もある。

「私は、またバラの世話にもどった。自然の色のほうが、自分には向いているのだ。」 (p.45)

科学よりも自然の方が、よりバラ色の生活があると、「私」が感覚的に気づいた結末である。

## 現代的意味

競争社会は、専門的に効率的に仕事することにより個性的になり、物質的に良い物が出来上がり、裕福になれる、という「功」の部分と、全体が見えにくくなり、独断的になり、人間関係や信頼感、愛情といった精神的なものが希薄になる可能性が強まる、という「罪」の部分の二面性をもつ。

ロンドン是我们にこの作品を通じて、他人、他の民族、感覚、自然などから謙虚に学び、目に見えないもの（信頼感や協力）を尊重し、他の人や自然とも共生して、可能な限りより人間的な生き方を提言しているのではないだろうか。ロンドンが競争社会では、1)全体が見えなくなる、2)友人の忠告も聞かなくなる、3)相手を傷つけ、時には死を招く、こともあるということを実感し、自然のなかで生きる決意をしている。これは晩年、ロンドンが競争社会に疲れて、愛妻と一緒に自分の船で南の海を航海したり、自分の農園での生活を楽しみにしていたことと重なる。

少子・競争・格差社会において、いろいろ競争社会のマイナス面（過労死、引きこもり、いじめ、コミュニケーションの不成立など）が強くなっており、人々は精神的な豊かな生き方を模索している。電腦社会における「匿名性」は、自分を見えない存在にして、他人を不当に攻撃する危険性をはらんでいる。人間は脳と言葉を利用して、地球の王者になり、富をはじめいろいろな物質を手に入れた。しかし、現代社会において、自然の中の感覚は軽視され、脳や言葉はうまく機能しなくなり、不幸な人が増大し、人間だけでなく動物・植物の破滅への道を歩みかけている。

年収1500万円を越すと、お金と幸せ度の相関関係が低下し始めると言われている。競争社会を一心不乱に生きてきた団塊世代の一人として、体、心、頭の健康のバランスと同時に物質と精神、仕事と家庭のバランスも考慮に入れて、自分のペースで自己を高め、他人と交流することによって、自分だけでなく他人も大切にするように心がけたい。

**注：本稿の引用やページ数は、ジャック・ロンドン著、辻井栄滋・森孝晴共訳『アメリカ残酷物語』（新樹社、1999）の「影と光」に基づく。**